

献辞

弘末雅士

栗屋憲太郎教授は、二〇一〇年三月三十一日付けをもって立教大学を退職される。教授は長年にわたり本学の学生、大学院生の教育指導にあたりとともに、多くの研究成果をあげられ、立教大学文学部史学科に東京裁判（極東国際軍事裁判）の研究で有名な栗屋先生ありと、広く社会に知られるにいたっている。

栗屋先生は、一九四四年に千葉でお生まれになり、都内で少年時代を過ごされた。その後、東京大学文学部国史学科で学ばれ、卒業後は東京大学大学院に進学されて、日本近現代史の研究を積まれた。社会人となられてからは、まず神戸大学で教鞭をとられ、一九七六年四月に立教大学においていただいた。以来三四年間という長きにわたり立教大学での教育・研究活動を担ってこられ、今日では立教大学文学部史学科を代表する研究者の一人である。

先生は、東京裁判を始めとして、日中戦争、太平洋戦争、昭和天皇など、日本の近現代政治史の中核となるテーマについてご研究を重ねてこられた。とりわけ東京裁判の研究では、アメリカで公開されたこの裁判関係の史料を用いて、その発展に多大な寄与をされた。そのご研究は、国内だけでなく、国際的にも高く評価されている。また、教育活動にもたいへん熱心で、たくさんの研究者をお育てになった。立教大学の発展のために多大の貢献をされた。

三四年間の立教大学でのお仕事を含め、半世紀近くにおよぶ研究者としてのご活動については、本日のこの講演会なかでたっぷり先生にお話をお聞かせ頂きたい。半世紀の時間は、時代を取り巻く状況に変化をもたらすとともに、人々の意識にもさまざまな変遷をもたらし、しばしばパラダイム・チェンジを起こさせる。自分がある時期に手がけた研究対象への視角やアプローチが、時代の変遷のなかでどのように変わっていくのか、あるいは維持されていくのか、また周り

献辞（弘末）

の人々の自分の研究に対する見方はどのように変わるのか、歴史研究者にとって自らの研究史そのものを考えるための貴重な材料となる。そうした時代の変化に対して歴史家は、時に苛立ちを感じることもあれば、また自らの視角を相対化してくれる醍醐味を感じたりもする。そのへんの想いも、本日お聞かせ頂ければと思う。

粟屋先生が今月をもってご退職をされることは、私共にとりたいへん残念なことであるが、これで決して先生の研究生活が終わられるわけではない。今度ともご健康に留意され、立教大学史学会等を通して、また私共を導いて下さるようお願い申し上げたい。また本日は多くの皆様方にお集まり頂き、御礼申し上げます。先生の想いをこの機会を通して存分にお聞き頂き、その後の懇親会で是非先生と直接お話しして頂ければと思う。

二〇一〇年三月

（立教大学文学部史学科長）